

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

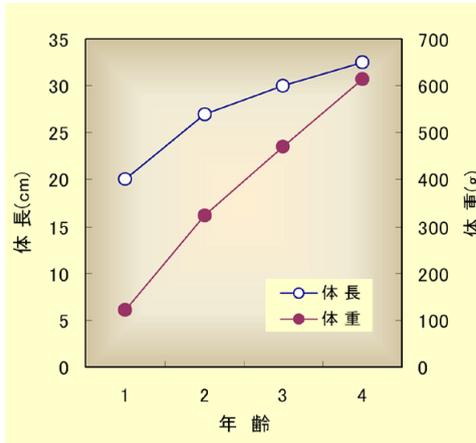
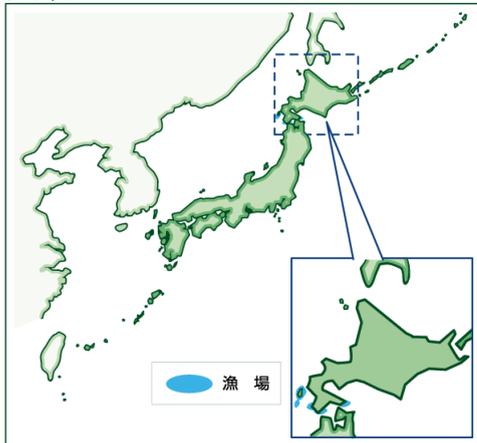
系群名 道南系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
 成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
 産卵期・産卵場: 11~12月、北海道渡島半島西岸および奥尻島沿岸の岩礁域
 正確な索餌場は不明、分布域は、北海道渡島半島西岸~本州北部日本海および噴火湾~本州北部太平洋
 索餌期・索餌場:
 食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は様々な種類の動物を捕食
 捕食者: 不明

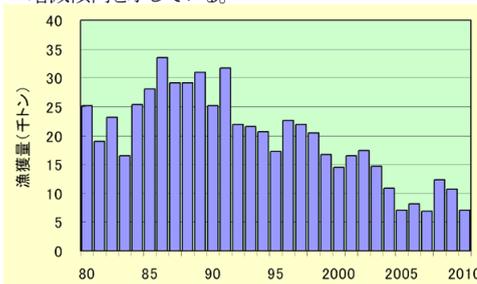


漁業の特徴

ホッケ道南系群は、当該海域の沿岸漁業(本州日本海では沖合底びき網漁業を含む)における主たる漁獲対象魚種の一つである。主に刺し網、定置網、底建網、まき網、釣り、籠などでほぼ周年漁獲され、特に春季の索餌期と秋季の産卵期に漁獲量が増加する。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は、1980年代後半に3万トン前後の高い値を示した後、1992年以降2万トン前後まで減少し、2000年代以降も減少傾向は続いた。2007年には6,822トンまで減少した後、2008年には12,243トンまで大幅に増加したが、2009年は10,728トン、2010年は7,017トンと再び減少した。近年、北海道側と本州日本海の両海域で類似した増減傾向を示している。



資源評価法

本系群の漁獲の大半は底建網や刺し網など多量の沿岸漁業である。漁獲努力量に関する情報の収集に当たっている現状であり、海域を代表するCPUEなどの資源量の指標を得ることは現時点では困難である。そのため、近年の漁獲量の変化から資源動向を判断した。

資源状態

本海域における過去36年間(1975~2010年)の漁獲量の平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2010年の漁獲量は7,017トンで17となったため、資源水準は低位と判断した。また、過去5年間(2006~2010年)の漁獲量は、2008~2009年に1万トンを上回る漁獲量となった他は低調な値で推移しているため、資源動向は横ばいと判断した。



管理方策

漁獲量の変動が資源の動向を反映すると仮定し、過去36年間の漁獲量の平均値から資源の水準を判断した場合、2000年代の大半が低水準である。比較的豊度の高い2007年級群と見られる加入によって2008年以降漁獲量が若干回復したが、2010年以降漁獲量は減少した。2011年春季の漁獲状況からも2009年級および2010年級群の資源豊度が低いと考えられるため、過度の漁獲圧がかからないように注意が必要である。このような状況をふまえて、ABClimitは、過去5年間の平均漁獲量(Cave5-yr)に0.4を乗じて算出した。ABCtargetは、不確実性を考慮した安全率である0.8を乗じた漁獲量とした。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	3,600トン	0.4Cave5-yr	-	-
ABCtarget	2,900トン	0.8・0.4Cave5-yr	-	-

資源評価のまとめ

- CPUEを得ることが困難なため、近年の漁獲量から資源評価を実施

- 過去36年間の漁獲量の推移から資源の水準を、また過去5年間の漁獲量の変化から動向を判断
- 2004年以降資源水準は低位で推移し、2008年には若干回復したが2009年以降は再び減少した
- 2009年級群以降、資源豊度は高くない(函館水産試験場 2011)

管理方策のまとめ

- 漁獲量が最低水準で推移していることを考慮し、漁獲圧の低減を検討する必要がある

執筆者: 森田晶子・福若雅章

資源評価は毎年更新されます。